

対話・他者との「出会い」の哲学から考える無条件の肯定的関心 : Schmidの論文から学ぶ?

著者	白? 愛里, 並木 崇浩, 山根 倫也, 小野 真由子
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	12
ページ	93-103
発行年	2021-03-15
URL	http://doi.org/10.32286/00022937

対話・他者との「出会い」の哲学から考える無条件の肯定的関心

—Schmid の論文から学ぶⅢ—

関西大学心理臨床センター 白崎 愛里

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 並木 崇浩

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 山根 倫也

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 小野真由子

要約

本稿は、Schmid (2001) の “Acknowledgement: The art of responding. Dialogical and Ethical Perspectives on the Challenge of Unconditional Relationships in Therapy and Beyond” の紹介とそれに基づく考察である。Schmid は無条件の肯定的関心を、対話や出会いの哲学、社会倫理の視点に基づいて「承認」として再提起した。承認とは、他者の、具体的で、特徴的な、独自のあり方に開かれることを意味する。他者とは、同一化もコントロールもできない、私とは本質的に異なる存在である。それゆえ他者を知ること (knowledge) はできない。他者の他者性を破壊せず関係を結ぶには、ただ共感し、承認すること (acknowledge) である。また理解し得ない謎を含んだ、無限の他者こそが、自己の限界を克服する。他者に出会うには、何よりもまず、他者が真に「向こう側に立っている」と理解する必要がある。反対側に立たずして出会いはない。この隔たりが、他者を、自立的な価値ある個人として尊重する。Schmid の言う承認に基づくセラピーでは、セラピストは、自身の内的照合枠を脇に置くどころか、クライアントの影響を受けて自己を問いたしながら応答することになる。これはセラピー関係の中に Th 自身を投入し、Th 自身が変化することであり、まさに勇気が問われる在り方といえる。また Schmid は、「(承認が重要なのは) 承認が実現傾向を育てるから、というだけではない。これこそがパーソン・センタードという在り方の表れなのだ」と述べ、パーソン・センタード・アプローチの本質にも迫っている。

キーワード：パーソン・センタード・アプローチ、3条件、受容、他者論、我—汝

1. はじめに

Rogers が治療論として論じたいわゆる中核3条件は態度条件といわれ、Th の内的努力によって実現される在り方である (中田, 2013)。この点に、理解の難しさ、学びにくさがある (斧原ら, 2017)。Th 個々の内的な体験であるために、それがどのようなあり方なのか掴みづらい

のである。また、中でも無条件の肯定的関心は、自己一致との間に葛藤が生じる、との困惑がしばしば持ち上がる (斧原ら, 2015)。

本稿は、Schmid (2001) の “Acknowledgement: The art of responding. Dialogical and Ethical Perspectives on the Challenge of Unconditional Relationships in Therapy and Beyond” の要約とそれに基づく考察である。

Schmid の論は、全体主義に対抗するものとして「他者との関係の倫理」を説いたユダヤ人哲学者の Levinas や、「我一汝」という、人間の、世界とのかかわり方を論じた Buber を援用しつつ、「他者」というキーワードを軸に、治療的観点のみならず、社会倫理の視点に立って、承認としての UPR を論じている点が興味深い。この Schmid の記述をもとに、他者を受容するとはどのような態度であるのか、また自己一致との関係についても改めて捉えなおしてみたい。

2. Schmid (2001) “Acknowledgement: The art of responding. Dialogical and Ethical Perspectives on the Challenge of Unconditional Relationships in Therapy and Beyond” の要約

この章では、無条件の受容を、パーソナル人間学あるいは対話の人間学の観点から検討する。また、ひとである、ひとになるという、基本的な人間性に関わる社会倫理の視点からも考察を加えたい。そのためこれは治療条件や Th の態度以上のものになる。無条件の受容は、共感や一致とともにプレゼンスと呼ばれる「共にいる在り方」を形作っている。これは援助関係を越えた人間性やコミュニケーションの基本的な構成要素である。

ここでは、対話や出会いの哲学に基づいて承認としての受容を振り返る。

【他者に「Yes」と言うこと：承認の意味】

条件なしの承認とは、他者を価値づけたり評価や判断をしないという以上のものである。それは自分の本質から、一人のひととしての他者に向かって、意志を持って積極的に yes という態度である。

ここでの重要なのは無条件性である。これは(こんな風に育ってほしい、行動してほしいというような)条件に縛られることのない心からの関心であり、不変の承認を「保証」する。

承認は関心と好奇心からはじまり、続いて他

者との対面が訪れる。またプロセスの特質としては、共感と深くかかわっている。これは開かれた弁証法的プロセスにおける共感である。つまり、人は確かに理解したことだけを受け入れられるのであり、受け入れたことだけが理解できるということだ。承認は、自分が自分を見るように他者を見ようとする場合にのみ可能になる (Schmid, 2001b を参照)。そしてそうすること自体が再び受容を促進する。したがって自己承認がなければ他者承認はなく、逆もまたしかりだ。

承認は、他者の、具体的で、特徴的な、独自のあり方に開かれていることを意味する。出会いの哲学ではこれを「他者の実現化」という。これは他者であるその人を実存的に確認することであり、他者を対象として観察するのは対照的な態度である。

誰かを承認するということは、その人への敬意に基づいた愛情であり、情緒的な温かさでもって関わることである。「いかなる情緒的巻き込みもない温かい関心」であり、他者を所有しないケアのあり方である。何があっても他者とともにいることであり、その人とその人の実現傾向への信頼の表れでもある。

これは他者の言うこと、することすべてに賛成したり、褒めたりすることではないし、他者の考えや態度をサポートすることでもない。より深く、つまり、相手の価値と尊厳に価値を置き、大切な存在として尊重することである。これは他者が本当に言いたいことは何か、と想像することではない (Rogers 1970, p. 50 を参照)。隠し持った疑いや評価などなく誠実に、その人が表現するままに、明らかにするままに、あるがまま受け取るということだ。

他者の他者性は恐れたり拒絶するような危険なものではなく、豊かさとして歓迎されるものだ。真の承認においては、社会的に望ましくない行動やネガティブな感情であっても受け入れられる。

価値の条件がいかに人を傷つけるかは、特に

養育と教育の分野において明らかだ。無条件の尊重とケアとは子どもの情緒的、人格的発達を育てる最もパワフルで積極的な態度である。Rogers (e.g. 1959) は、積極的関心は人間の本質的で普遍的な欲求であると確信していた。

条件のない承認は、自己承認、自己受容、自尊心を育む。他者から愛されることは自分を愛することの前提条件である。互いに受容し合うことによって、議論やおしゃべりが、対話に変わる。対話は相手を知ること (knowledge) ではなく、一人のひととして相互に承認 (acknowledge) し合うことを目指す。

【向かい合って出会うということ：「相対する (being counter)」ことの重要性】

パーソン・センタード・セラピー (以下、PCT) は、一人のひととして人間に価値を置く。しかし、この専門家中心からクライアント中心へ、というパラダイムシフトの真価はいまだ十分に理解されていない。これには、相手を受容することは、その人を真に他者として承認することだ、という認識がある。

他者は他我ではなく、また同一化もできない。完全に異なる人なのだ。この事実を十分に尊重してはじめて、出会いが可能になりコミュニティに入ることができる。他者に出会うとは、何よりもまず、他者が真に「向こう側に立っている」と理解することである。なぜなら相手は本質的に私とは違うからだ。

偉大なプロテスタント神学者である Paul Tillich (1886-1965) は、Rogers との公開対話 (Rogers・Tillich, 1966) において、ひとというのは、他者との出会いにおける抵抗から立ち現れてくるのだと語っている。もし人が「他者の抵抗に出会わなかったら、自己は自分を完全だと思うだろう。個人は物質世界を征服することはできるが、他者をひととして破壊することなく征服することはできない。個人はこの抵抗を通して自己を発見する。他者を破壊したくないのなら、相手とともにコミュニティに入って

いかなければならない。ひとが生まれるのは、他者の抵抗を通してなのだ」。

ユダヤ人哲学者で神学者の Martin Buber (1878-1965) は、ひとになるということは、「向こう側になる」ことだと指摘した。ひとは、出会いの前提条件である隔たりを獲得する能力によって形作られる。「向こう側である」ことは向かい合って出会うための基盤である。他者の反対側にいることで、他者に向き合い承認することができる。

一歩離れて他者に自分を向けることが、相手の反対側に立つ、「向こう側になる」ということだ。この立ち位置が他者を、私から離れて、独立した自立的な価値ある個人として尊重する。向かい合って立つことで、他者を同一化したり対象化したりせずにいられる。それが出会いを可能にする。反対側に立って他者に向き合わずして出会いはありえない。

向こう側に立つということは、互いに空間を与え合い、また共通の空間を分け合うこともある。それが敬意の表れとなる。相手に向かい合う中で、私はその人を知れるとは思っていない。ただその人が開示するものを受け入れる用意があるのだ。

これは簡単なことではない。向こう側に立つことは常に対立や葛藤をはらんでいる。よって出会いと承認を理解する上で攻撃性を扱うことは必須である。

【不可解な謎によって目ざめさせられること：出会いの挑戦】

Emmanuel Levinas (1905-1995) は、現象学的にも発達心理学的にも他者が最初であり、これは倫理的な議題だと述べている (Levinas, 1961, 1974, 1983)。

Levinas は、いまだすべての西洋哲学に「自我論」が残っていると指摘している。西洋哲学の流れをくむ心理学、心理療法 (ヒューマニスティック志向含めて) も同様である。それらが人の道具化、対象化を嫌うにもかかわらずであ

る。これは最終的には他者の軽視、他者が私にもたらす意味の軽視につながる。

Levinasは、かつて人間特有の性質と言われた「自己決定」「自己実現」の欲求が他者への暴力につながることは20世紀の歴史が証明している、と指摘する。よって「自我の目的の実行」を…(人間の思考や行動の基礎にすべきではない。)…(むしろ)他者の視点を基礎とすべきだ。これが倫理的な関係なのである(Waldschütz 1993)。

Levinasによれば、存在するということは、自分自身の中にとらわれ、自己の世界全体につかまるとのことだ。人間が経験する最初の疎外は、自分自身を引きはがせないというところにある。そこで単純化した道徳は、自分自身の主になるという方向に向かうが、これは誤りである。自立しても、自己のとらわれの状態からは目覚められない。他者こそが私を自己から解放する力になる。自己信頼の基礎は、自己を振り返ることではなく、他者との関係にある。これが自己の限界を克服する。自己は他者との関係の中に生まれるのだ。

他者は私に到来し、私にアプローチする。運動の方向は汝から私、である。発達の観点から言っても、この運動は常に汝に起源をもつ。それは他者からの呼びかけであり、この呼びかけが応答を呼び起こし、自由とリスクに立ち向かう。出会いは私が出会おうと意図するずっと前に生じている。

したがって、対話における出会いは、自意識のための条件であり、無限に開かれ、全体主義を超越し、戻ることのない旅の始まりになる。

言い換えれば、出会いは常に挑戦である。「出会いとは、不可解な謎によって、目を覚まさせられることだ」とはLevinasの言葉である(1983, p. 120)。

【呼びかけられて応答するということ：知識(knowledge)から承認(acknowledge)へ】

他者は匿名の見知らぬ人ではなく、汝として

私に浮かび上がってくる。

(私が誰それについて話す、というときの、対象としての)彼や彼女は、応答する力を持たない。しかしあなたは、応答する。—あなたにとっては、私は、応答する。あなたは決して対象とはならない。祈願(invocation)であり、プレゼンスである。対象は判断したり評価しうるものだが、あなたは、ただ信じるべきであり、愛を通してのみ繋がらう。

したがって、求められるのは知識(knowledge)ではなく、実現化のパーソナルな方法である、承認(acknowledge)なのだ。

他者への正義は、知覚(per-ception)から受容(ac-cept-ance)へ、知識から承認へとシフトすることによってのみなし得る。この認識論的パラダイムシフトは、特にパーソン・セントード・アプローチ(以下、PCA)における出会いや対話の哲学を理解するうえで極めて重要になる。

私たちは他者を把握する(把握(comprehend)の語源は「含む(surround)」あるいは「囲む(encircle)」)ことはできない。他者が彼ら自身を開示しているのだ。真に他者であるならば、その人を知る(know)ことも認識する(recognise)こともできない。ただその独自性を尊重すべきなのだ。他者をよく理解するには、他者が知らせようとしているもの、明らかにしようとしているものに開かれていなければならない。

知識が評価を伴うのに対して、承認は信念を伴う。出会いは知識を確かめることを目的とはしない。それは信念である。つまり承認は愛と同義である。

他者とは把握されることが不可能な存在である。共感される存在なのだ(Schmid 2001bを参照)。根本的な他者の他者性に気づいていることで、彼らの開示のプロセスを促進できるが、指示したりガイドすることはできない。

矢印は他者から私なのであって、私から他者ではない。汝—我の関係なのだ。他者を理解し

ようとするとき、私たちから彼らに向かって、彼らが誰でどんな人なのかと推測することはしない。彼らが経験し、伝え、明らかにするあらゆることに開かれていることで他者を理解しようとする。

そして上述のように、彼らを承認することで私たちは応答する（respond）ことができ、ここから私たちの応答可能性（respons-ability）が生じる。だから、セラピー関係であろうと他のいかなる個人的関係であろうと、相手に誠実に応じるということは、倫理的な挑戦になるのだ（Schmid, 2001a を参照）。

【称賛と応答：承認の実体的側面と関係的側面】

西洋文化では、個人の個性や自立性と、相互関係や相互連帯への能力・欲求、の両方に等しく価値を置く。Rogers の人間観も明らかにこれと同様のものが見受けられる。

承認は、実体的（substantial）観点からみると、愛される価値がある人として、その人の独自性を称賛することであり、それが、その人の価値に対する答えになる。

対して関係的側面からの受容は、他者の理解されたい、つながりたいという欲求への答えとなる。

【可能性の承認：私たちがなるかもしれないものに至るための挑戦】

実体的な意味では、承認は、その人の、現在を超える可能性に価値を置くことの重要性を示している。

Buber（1950）※は、「受容、肯定」と「確認」を区別して使っている。受容は関係の始まりである。その中で、他者は真に他者であり、私たちはその瞬間のその人のありのままを認識する。だが「確認」はそれ以上のものだ。確認するということは、他者が、今何者か、というだけでなく、どうなり得るかも含む。そこで他者の生きられていない可能性が動きだす。

Buber はこれを他者のための実存的挑戦であると言った。つまり、他者が、この先なるかもしれないものに至るための挑戦である。Buber はこの種の対話を、共闘、パートナー同士の戦いと考えており、相互性を重視していた。

Buber は、他者の可能性は、その人を確認することによって、その他者に出会っている、私が、見つける、と考える傾向にあった。これは指示的な瞬間に見える。一方 Rogers は、人になり得るものを見つめるプロセスは、その人自身によって到達されるのだと考えた。

Buber が強調するのは、受容はすべての真の関係の始まりだが、確認はこれを超えたものだということだ。彼は以下の夫婦の例を用いてこの点を説明している。「夫は、はっきり言葉にはしなくとも、ただ彼女との関係全体で「僕はありのままの君を受け入れる」と伝えます。しかしこれは「君が変わってほしくない」という意味ではありません。これは「僕は君の中に、まさに僕の受容的な愛によって、君が為るべく意図されているものを見つめる」と言っているのです（Rogers・Buber 1960, p. 219）」。

対話の1年後の1958年（p. 14）、Rogers は明らかに Buber の「確認」を引きつつ、プロセスの質について以下のように強調している。「他者を、すでに診断され、分類され、過去によって形作られ、治療される者として受容する場合、この制限された仮説を確認することが私の役割になる。もし生成するプロセスとしてその人を受容するなら、その人の真の可能性を確認する、あるいは形作るために自分にできることをやるだろう。[...] 私はその時、一人の生きている人として、内的成長を生み出す力のあるものとしてその人を（Buber の用語を使って）確認している。」

このように、承認は、受容や確認と、挑戦や刺激という2つの意味を含んでいる。両者が相互に弁証法的に関連し合っているのだ。

Buber は、共感と承認は近い関係にあると見ている。Rogers（1975）も、共感が確認を提

供すると述べている。ここで承認と共感が一体となる (Schmid, 2001b を参照)。

【刺激の承認：他者の呼びかけに応じるということ】

人間を関係的に考える時、承認は応答の挑戦につながる。

他者は私が生まれる「以前」にここにおいて、私たちを歓迎する。彼らは私とは異なる人であり、驚きをもたらす存在である。この観点からみると、他者とは私たちへの呼びかけであり、刺激である。他者がまず呼びかけるのである (Schimid, 2001a を参照)。私はそれから逃げることはできない。私の代わりに答えられる人はいないからだ。そのため私は呼びかけに答える義務と責任を負う。

すべての出会いに、呼びかけへの応答がある。そして上述のように、私の代わりに誰かが応じることはできないという点において、応答には義務が伴う。これは出会いの倫理的側面である。

個人の独自性と他者性とは、汝との関係において、直接関係し合って成長する。人間は反対の人との関係によって人となり、コミュニティに入って行くのである。

【アグレッション：互いに歩み寄ること】

対立は、しばしば UPR との関連で議論される。特にそれが Th からクライアント (以下、Cl) に向けられる場合、UPR との間に葛藤が生じることになる。対立と UPR の問題は、個人的な関係においても、パーソン・センタードの関係においても、アグレッションとその意味という基本的な課題につながる。これは PCT ではタブー視されがちなテーマだが、人生の重要な一部であり、人間と人間の間を関係理解する上でも重要である。

真の出会いとは、「ag-gredi」することであり、互いに歩み寄ること、互いにアプローチすることである。Aggredi (ラテン語の aggression) は、「誰かに向かうこと」「アプローチす

ること」「攻撃すること」「始めること」を意味する。パーソン・センタードの視点から言えば、アグレッションは、怒りや拒絶、皮肉、積極性など様々なアグレッションの形の中から実現された、人間の建設的な力だと理解されるべきである。実体的観点からは、アグレッションは実現傾向の表れといえる。一方、関係の観点からは、葛藤に対処するために他者に向かっていくことを意味する。また、自立に向かう努力は、他者との違いを示すこと (たとえば思春期などに他者にノーと言うこと) でアイデンティティを獲得する、というようにアグレッションにおいて明らかになる。この分離の動きは自己承認、他者承認の基礎にもなる。一方、関係的には、アグレッションが他者に向かうにつれ、対立を通して他者を関係のパートナーとして受け入れるようになり、相互のつながりが明らかになる。「相手に反対する」という状況では、相手に向かい合い、相手の向こう側に立つ出会いのために、アグレッションは欠かせないものになる。アグレッションは接近することと距離をとることの両方を保証し、調整して、人がアイデンティティを失うことから守ってくれる。また葛藤を抱えられるということは、成熟のしるしであるだけでなく、暴力を防ぐうえでも非常に重要になる。

アグレッションは否定されたり不完全に、あるいは誤って、歪曲されて象徴化される場合に破壊的になる。破壊的な表れ方としては、他者への哀れみ、あるいはうつ、自殺などがある。身体化や依存もその別の表現型といえる。アグレッションは受け入れられたり、透明であれば破壊的にはならない (Rogers 1960, p. 177)。

したがって、特に PCT においては、オープンにアグレッションを取り扱う。Th は、葛藤に開かれていなければならない。効果的なセラピーのためには、アグレッションをできる限り十分に受容し、理解し、象徴化し、そして統合することが不可欠となる。

【パーソナルな愛：強さを持ったある種の好意】

承認は他者のプレゼンスと呼びかけへの個人的な応答であり、私たちは互いにその義務を負う。しかし、人間が本当に互いに負っているものは愛なのだ。このように言うと、人によっては馴染みがなかったり、非科学的に思えて受け入れられないかもしれない。しかし、ここで描かれるひとの在り方は、このシンプルな言葉、つまり愛に収束する。

ここでいう愛とは「パーソナルな愛」と呼ばれるものであり、人間の仲間同士の関係の基盤となる在り方を指している。これは、他者にも自分自身にも向けられる愛だ。パーソナルな愛は、一人のひととして愛されることを意味する。

Rogers も、UPR を愛だと理解していた (Rogers, 1951, p. 159)。そしてそれがセラピーの重要な原動力であると強調している。

「自分を無価値で愛されないとと思っている CI は、Th とのこの限定的な関係の中で、自分が受容され、尊重され、愛されていると気づくようになる。ここでいう「愛される」とは、深く理解され、深く受容されるということである (同 p. 160)。」

「肯定的関心とは、CI のあるがままに向けられたある種の愛である。それはアガペーと同義であり、性愛や所有的な愛と理解してはいけない。他者を一人の別個の個人として尊重することであり、相手を所有しない感情である。それは強さを持ったある種の好意であり、相手に求めない。これを肯定的関心という (Rogers, 1962, p. 94)。」

対話的、哲学的視点からみれば、出会いにおいては、愛だけが唯一十分なコミュニケーションであるといえる。しかし、出会いが二者関係を超えて第三者 (多くの他者、あるいは他者にとっての他者たち) に開かれるのも、愛においてである。Levinas は、私たちは一人の人間の世界に生きているのではなく、多くの人間たちの世界に生きているのだ、と述べている。出会いは我一汝の共時性、一方向性、閉塞性を超え

て、通時的な関係へと向かう。愛することで閉塞的な二者関係を超越し、第三者に、グループに、コミュニティに開かれる。そしてまたそのコミュニティ自体が出会いの場を提供する。この「完全にとともに」という在り方は、我一汝の閉塞的な関係を超越し、私たちの中に、ともにいるということの意味する。そこに自由の源がある。これこそが正義や判断に不可欠なものであり、愛情を、共に愛すること (聖ヴィクトールの Richard や Levinas、Windisch らが言うような感覚 (Schmid, 1994, p. 154-155 を参照)) に変える。

【承認としてのセラピーを訓練する：個別のセラピーにおける承認と、グループセラピーにおける承認】

PCT では、人間は一人のひととして理解される。Th は CI に関する知識を得ようとする代わりに、CI の人格と出会い、CI を他者として承認する。

セラピーにおいて出会うということは、CI が成長するための自由と場を提供することである。この成長のプロセスは一人のひととしての Th のプレゼンスによって促進される。これはいかなる意図やねらいも持たず、いかなる役割や機能も演じない態度である。Martin Buber (1962/63) によれば、出会いは、「本物であること」によって特徴づけられる (Schmid, 2001a 参照)。これは「うわべの侵入」をすることなく、存在し、他者を受容 (つまり一人のひととしての他者に yes と言うこと) し、「理解 (comprehension)」と「包括 (inclusion)」(つまり他者の独自性を受容し、確認し、これに開かれていること) によって達成できる。これは Rogers の中核 3 条件に非常に近い在り方だ。

このようなセラピーは、従来の、CI を治療するために Th が CI に関する知識を聴取する心理臨床や医療モデルの理解を覆す。

今や CI が専門家であり、CI がプロセスに開かれ、指示する。Th は、CI の開示するすべて

を無条件に承認することで、CIに一人のひととして応答する。したがって、まず最初の課題は、CIに関するよいアイデアを放棄することである。Th、CI双方がCIについての先入観を捨て、新しい、創造的な可能性を迎え入れるのである。標準診断よりも他者の独自性を、知識よりも承認を優先する人間観においては、基本的、原理的非指示性は合理的な帰結である（Schmid, 2001aを参照）。

この態度を「寛容さ」や表面的な「なんでもOKだよ」という感覚と混同してはならない。セラピーにおける承認とは、CIが自分の可能性を信頼し、自分自身を承認するよう、積極的に勇気づけることである。Bozarth（1992）は、承認こそがすべての根本になる条件だと確信する。それは承認が実現傾向を育てるから、というだけではない。これこそがパーソン・センタードという在り方の表れなのだ。

多くのThにとって、CIとCIのプロセスをコントロールせずに続けることは非常に難しい。これは相手を他者として尊重し、コントロールすることは、興味を持つこととは正反対だと気づくことで達成できる。また究極的には、相手が真に他者であると理解していれば、その人をコントロールすることなど不可能だとわかるだろう。

承認の一つの側面は、CIから出てくるものは感情であれ考えであれ記憶であれなんでも受け入れるということだ。Thは特定の表現方法や象徴化の仕方やテーマや好みを促したりしない。「今この話だけしましょう」とか「感情に集中しなければなりません」というようなルールを設定することもない。PCTにおいては、CIは、語る内容の専門家であるだけでなく、プロセスの専門家でもある。

グループセラピーの場合、グループも、個々のメンバーも受容することが不可欠だ。グループを受容するということは、グループがルールを守っているかどうか、正しい方向に正しいスピードで進んでいるかなどということに夢中にな

らないことだ。あらかじめ目標や条件設定されているような状況では、権威との葛藤を起さずに無条件に受容することは難しい。残念なことにこれは精神病院など医療現場でよく起こるケースである。

承認はどうやって学ぶことができるだろうか？それは承認されることによって、つまり承認それ自体によってである。おそらく自分自身が愛されてよい存在なんだと学ぶことが一番難しい課題である。自分への承認なしに、他者への承認はない。

【一人のひととして応答すること：勇気が問われる】

Levinasの他者論から考えると、心理療法は社会倫理への挑戦になる。これは「応答」や「責任」という次元から、自己実現の新たな理解へと私たちを導く。この自己実現は、Levinasの言う「奉仕（diakonia）」においてのみなされる。セラピーと呼ばれる人間間の出会いでは、私たちは、呼びかけられ、応答を求められるとき、同時に深い責任と義務を引き受ける。その際相手は、私たちが奉仕（これは互いに負っているものだが）を差し出すのを待っている。そこには愛だけがある。

パーソナルな愛として理解される承認は、「答えること（art of answering）」である（Pagès, 1974, p. 307）。つまり、世界や他者に対して、内的自由から、そして隔たりの向こう側から、応答するのである（Coulson, 1983, p. 24を参照）。これは、単純な答えを与えるということではなく、一人のひとである自分自身として答えるということによってなし得る。

これは勇気の問題であると私は考えている。単純に言えば、私たちは、CIを愛する勇気があるだろうか、と問われているのだ。

何が起きるか予想がついて安全な技法に頼らず、CIの、そして自分自身の能力を信頼する勇気が必要なのだ。開示され明らかにされているものを承認し、他者の不思議に驚かされ、勇気

をもって受け取る、受容するということは危険を伴う。

3. 考察

(1) PCAの本質とは何か

承認が大切なのは、「承認が実現傾向を育てるから、というだけではない。それこそがパーソン・センタードという在り方の表れなのだ」と Schmid は述べている。つまり、承認は治療として効果的だから重要というだけではない。他者であり、それゆえ私が決して所有し得ない独立した一人のひととの関係にあっては、共感し、承認する以外にかかわる術はない、というのが彼の主張である。他者をコントロールするような技法を用いたり、対象として分析するということは、他者を自己の一部として所有することであり、他者の他者性は消失し、もはや他者ではなくなってしまう。他者は本質的に、知ることも判断することも条件を付けることもできない存在なのだ。他者を破壊しない、つまり他者の他者性を受け入れ、自分とは違う人として承認し続けるという信念が、Schmid のいう「他者への正義」であり、倫理であり、それらが遂行されている限りにおいて、パーソン・センタードであり得るのだ。これはまさに Schmid が PCA の本質に迫った主張であると言える。

(2) 他者に開かれるということ：自己の問いただし

承認の質としてたびたび登場する、他者（無限）に開かれるとはどのような態度であろうか。また、他者との関係において自己が生まれる、とはどういうことか。Schmid は自己を理解するプロセスを「無限のプロセス」（Schmid, 2001b）とも呼んでいる。この点についてセラピーにおける Th の態度という観点を念頭に置きつつ、読み解いてみたい。他者が無限であると表現したのは Levinas（1961/2005）である。ここでいう無限とはどこまでいっても汲みつく

せない、私の手からあふれ出る、という意味である。他者は私の外側から、私とは本質的に異なるものとして私に到来する。人間は他者と深くつながりたい、自己に取り込みたいと渴望するが、空気や水と同様どこまでいっても他者は私からあふれ出る。他者＝無限なのである。他者から投げ込まれる異質な体験を、私は、自分の照合枠に当てはめることも、一般化することもせず、できるだけ他者が意味するそのままに聞き入れようとする。そこには常に理解し得なさが含まれている。そしてこの理解し得ない他者の他者性が、私の感覚、思考、照合枠を「問いただし（Levinas, 1961/2005）」のである。例えば CI が「あいつを殴りたいんだ」と言った時、Th である私は、「彼は ADHD 傾向があり、そのためこれは衝動性の高さの表れであろう」というような分類によって把握することはしない。理解し得なさを含んだ他者性として聞き入り、CI の指し示す体験をその意味を損なわずに感じ取ろうとする。そして「法律で禁止されているのでしてはいけない」というような一般化した答えではなく、自己に生じるあらゆる体験を受け入れ、自分自身を問いただし中で生じてくる偽りのない自己で応じるのである。このとき、Th は既存の自己の枠組みを超えて新たな体験に開かれていくことになるだろう。これは Schmid（2001a）が「他者は私に、受容と承認のもと、自分の見方や自分自身を変えるよう要求する」と書いていることとも一致する。この問いただしは異質で無限な他者によってのみ生じるのであり、いくら自己の内だけで自問しても生じ得ない。他者を自己に迎え入れることによって「はじめに、「自己のとらわれ」から「目覚め」、自己の限界を克服して、無限に開かれていくのである。これが自己理解の「無限のプロセス」であり、他者の「向こう側に立つ」ことにもなる。本文中で Schmid も引用しているが、Rogers も、セラピーにおいて Th 自身が変化することについて語っている（Rogers, 1957）。これは「（共感的理解を通じた応答によって）Th

自身の体験を脇に置く」(Freire, 2001) という態度とも CI の体験過程を促進するために CI の言葉を正確に伝え返す (Gendlin, 1974) という態度とも全く異なる。Th の内的照合枠を脇に置くどころか、それを問いただして応答するのだから。Th が本質的に自分自身を関係の中に投げ込む在り方であり、まさに「勇気が問われる」在り方だと思える。そしてこのような承認においては、承認しながら同時に対立することすら可能になる。

Schmid は、「対立を通して他者を関係のパートナーとして受け入れるように」となると書いている。これは、「あなたはそういう意見なのね (私は違うけど)」とか「人は人、私は私」というような、表面的に他者を異なる人として受け入れる態度とは違う。このような態度は閉ざされた態度であって、その実、他者を受け入れてはいない。対立を通して他者を受け入れるとは、互いの自立性を維持しながら、同時に、他者を迎え入れ、他者に影響されてその都度自己を問いただしつつ、応答を (時には反論を) 試みるという態度である。他者に影響されるには、他者に開かれることが必要であるし、それによって自己を問いただすには、純粋に自分自身であることが不可欠となる。ここではもはや UPR と自己一致は矛盾しない。承認のもとでの対立があり得るのである。

(3) 今後の課題

Levinas の論は徹底的に私を起点として他者を語り、他者との隔たりを維持し続けることで、全体性に内包されることを拒絶した。しかし、PCT には CI を治療しようという意志があり、治療論がある。治療論の視点は、外部の視点であり、そこから Th と CI を眺め語るものである。これはすなわち Th と CI を全体性の中に位置づけるのである。この時、他者との絶対的な隔たりは崩れることになる。しかし、治療論を放棄すれば、私たちは Th ではなくなってしまふ。他者の他者性を尊重することをパーソン・

センターの本質と考えるならば、この矛盾もまた PCT の本質に関わる問題になるのではないだろうか。このような矛盾は克服されるのか、できるとしたらいかにして克服されるのか。この点について Schmid (2001) は触れていない。Schmid 同様、筆者にも、Levinas や Buber の他者論は、「PCT の本質とは何か」という問いに答えるための多くの手がかりを有しているように思える。それゆえ、真に彼らの知見を PCT に取り込めるのか否か、今後さらなる検証が必要と思われる。

文 献

- ※ Schmid は本文中で Buber (1950) を引用しているが、引用文献欄に記載がなく、どの文献であるのか詳細がわからない。
- Bozarth, J. (1992). *A theoretical reconceptualization of the necessary and sufficient conditions for therapeutic personality change*, Paper given at the Fifth Forum on the Person-Centered Approach, Terschelling.
- Buber, M. (1962/63). *Werke, vol. 3*, München: Kösel.
- Coulson, W. R. (1983). Über therapeutische Disziplin in der klient-zentrierten Therapie. Was lehren uns kritische Ereignisse in Einzel- und Gruppentherapie? In: Tscheulin, D. (ed.) *Beziehung und Technik in der klientenzentrierten Therapie*. Weinheim: Beltz, 15-29.
- Freire, E. (2001). Unconditional Positive Regard: The Distinctive Feature of Client-Centered Therapy. In Bozarth, J. D. & Wilkins, P (Eds.), *Unconditional Positive Regard*, Ross-on-Wye, PCCS Books, 145-155.
- Gendlin, E.T. (1974). Client-centered and experiential psychotherapy. In D. A. Wexler & L. N. Rice (Eds.), *Innovations in client-centered therapy*, 211-226, New York: John Wiley &

- Sons.
- Levinas, E. (1961). *Totalite et Infini. Essai sur l'intériorité*, Martinus Nijhof. (熊野純彦 (訳) (2005) 全体性と無限, 岩波書店.)
- Levinas, E. (1974). *Autrement qu'être ou au delà de l'essence*, Den Haag: Nijhoff.
- Levinas, E. (1983). *Die Spur des Anderen: Untersuchungen zur Phänomenologie und Sozialphilosophie*, Freiburg: Alber.
- 中田行重 (2013) Rogers の中核条件に向けてのセラピストの内的努力：共感的理解を中心に，心理臨床学研究，30(6)，865-876.
- 斧原藍・白崎愛里・中西達也・中田行重 (2015) 初学者が抱くパーソン・センタード・セラピーのイメージ：教育・訓練への示唆を求めて，関西大学臨床心理専門職大学院紀要，5，91-99.
- 斧原藍・白崎愛里・中田幸重 (2017) “パーソン・センタード” とは何か—その輪郭の明確化に向けて (2)，日本人間性心理学会第 36 回大会プログラム・発表論文集，136-137.
- Pagès, M. (1974). *Das affektive Leben der Gruppen: Eine Theorie der menschlichen Beziehung*, Stuttgart: Klett; orig: La vie affective des groupes. Paris: Dunod, 1968.
- Rogers, C. R. (1951). *Client-centered therapy, Its current practice, implications, and theory*, Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103.
- Rogers, C. R. (1959). A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In: Koch, Sigmund (Ed.), *Psychology. A study of science. Vol. III: Formulations of the person and the social context*, New York: McGraw Hill, 184-256.
- Rogers, C. R. (1962). The interpersonal relationship: The core of guidance. In Rogers, C. R. and Stevens, B.(Eds.), *Person to person. The problem of being human*, Moab: Real People Press, 89-104.
- Rogers, C. R. (1970). *On encounter groups*, New York: Harper and Row.
- Rogers, C. R. (1975). Empathic — an unappreciated way of being, *The Counseling Psychologist*, 5(2), 2-10.
- Rogers, C. R. and Buber, M. (1960). Martin Buber and Carl Rogers, *In Psychologia. An International Journal of Psychology in the Orient* (Kyoto University) 3, 4, 208-21.
- Rogers, C. R. and Tillich, P. (1966). *Dialogue between Paul Tillich and Carl Rogers, Parts I and II*, San Diego: San Diego State College.
- Schmid, P. F. (1994). *Personzentrierte Gruppenpsychotherapie: Ein Handbuch. Vol. I: Solidarität und Autonomie*, Köln: Edition Humanistische Psychologie.
- Schmid, P. F. (2001a). Authenticity: The person as his or her own author. Dialogical and ethical perspectives on therapy as an encounter relationship. And Beyond. In Wyatt, G. (Ed.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 1: Congruence*, 213-228, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2001b). Comprehension: The art of not-knowing. Dialogical and ethical perspectives on empathy as dialogue in personal and person-centred relationships. In Haugh, S. and Merry, T. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 2: Empathy*, 53-71, Ross-on-Wye, PCCS Books.
- Waldschütz, E. (1993). Was ist „Personalismus“? In: *Die Presse, Spectrum*, XII.